

## 没後 50 年 「藤田嗣治展」 Fujita A Retrospective

東京都美術館 2018.07.31~10.08 京都国立近代美術館 2018.10.19~12.16



「藤田嗣治」フランス名「レオナルド・フジタ」（1886～1968）は、80年を超える生涯のおよそ半分以上をフランスで過ごし、欧州で最も高い評価を得た日本人の画家として知られている。画伯の技法は、日本画用の筆を用いて細やかな線と女性の肌を炭酸カルシウムと鉛白を混ぜた絵具で、乳白色に描く独自の工夫が評価され「画壇の寵児」となった。

本展は、画伯の没後 50 年を記念して史上最大級の大回顧展で彼の代名詞となっている“乳白色の裸婦 10 点余”はもとより、欧米の主要な美術館の協力を得て、初来日作品やこれまで紹介される機会が少なかった作品も展示されているのが特色である。

展覧会構成は、「風景画」「肖像画」「裸婦」「宗教画」などの油彩画を中心とした「100 点余の作品」で、画業の全貌を解き明かす「大回顧展」としての開催。

《カフェ》（ポスターの写真） 1949年 油彩・カンヴァス

パリの日常的な小さなカフェの片隅で、テーブル席で黒い服に透き通るような白い肌が印象的な女性が、机上の便箋にしたためる内容も定まらず、頬杖をつき物思いに耽って憂いのある表情をしている光景である。本作は、ニューヨークで制作されたものの一つで、彼女の座っている茶色の皮張りのソファ越しに見える窓の外には、憧れである有名な「パリの街角風景」が広がっている。

《エミリー・クレーン＝シャドボーンの肖像》1922年 油彩、銀箔、カンヴァス



本邦初公開の注目される作品。

有力者からの「注文画」で、モデルはパリ在住の裕福な米国人女性で、青と黒のドレスと金彩の長椅子に黒猫と銀箔が競演している。

大きなクッションに上半身をあげ、ソファで寛ぐ背景に貼り込まれた「銀箔」は、制作時は描かれた布や人肌に猫の柔らかな質感と金属の硬質さの美しさが印象的であったが黒変した状態となっている。